

選 評

こども怪談コンクール審査委員長

東 雅 夫 (文芸評論家・アンソロジースト)

昨年、大きな反響を呼び、たちどころに、第二回の開催が決まった、岡本綺堂顕彰事業の『ぶちぶちこわいはなし』こども怪談コンクール。その結果発表をお伝えする。

今年は、われわれ審査スタッフを大喜びさせるような想定外の結果が齎された。「小学生の部」の応募総数の飛躍的な増加である。これが、本当に小学生が書いた作品なのか!?と驚かされるような、突飛で、不思議で、奇怪な物語が、数多く寄せられたのは昨年も同様だったが、今年は全体の数が増加したこともあってか、より一層、奇妙な作品が数多く寄せられた気がする。

その典型というべきが、特賞に輝いた竹内甫の「ブリ」だろう。ブリの寿司が好物という読者も多いだろうが、物語はすぐさま、妙な方向へと走り出す。ブリ好きのあまり、ブリしか食べない無気味な友人たち。そして唐突に登場する「ブリの着ぐるみ」をかぶり、冷凍ブリ(ー)を振りかざして主人公に襲いかかる、謎の人物!一見、荒唐無稽なようでいて、実はブリつながりの奇妙な一貫性のあるストーリー!似たような傾向は、「あの日のベランダ」「恐怖な自分」「シロコマカの呪い」「奇妙な人」などの応募作にも共通して認められる。

これに対して優秀賞の白井董「盛り上がった土」は、史実に裏付けられた、綺堂先生のお手本を彷彿させる物語だった。突如噴出する水の、生々しい恐怖よ!

「中学生の部」も、数こそ少なかったが、年長者らしい落ち着いた文章で綴られていて、印象に残った。特賞作品は、お約束のオチだが、なかなか上手い。なぜ「花牛さん」なのか……考え出すという怖い。優秀賞の「記憶の中の扉」の抒情性も、得がたい味わいだった。空いたままの扉!